

有村 「出て行きませんか、先生の元でデビューできるまで絶対出て行きませんか。」

### 少しの間

先生 「あのね〜!」

有村 「好きなんです。歌が好きなんです。その気持ちは誰にも負けません。歌を歌っているときに一番幸せなんです。」

先生 「……………」

有村 「僕だって好きでカラオケボックスで歌ってるわけじゃありません……………東京に出て来たのだってオーディションに受かったからです。デビューできると思ったからです。母ちゃんは反対しました。せめて大学ぐらい出てからにしないと……………でもチャンスだと思っただんです。このチャンスを逃したらもう二度と無いなと……………で、高校卒業と同時に東京に出てきたんです。」

先生 「何でそのときにデビューできなかったのかな？」

有村 「無かったんです。」

先生 「ん?」

有村 「事務所がなかったんです。オーディションの合格通知が来てその後、マネージャーとか言う人から電話が来て、とりあえず事務所に所属させるから専属契約料として三〇〇万振り込んでくれ!その後の段取りはこっちでやっとかから君は高校を卒業したら東京に出てきなさいと……………信じるじゃないですか!18歳のガキですよ!小学生の時から歌手になりましたか!三〇〇万すぐに振り込みましたよ。もちろん僕はそんなお金持ってないから母ちゃんに借りて……………母ちゃんだって三〇〇万なんてお金作るのが大変だったと思います。若くに父ちゃん無くしてるから、女で一人じゃないちゃんの牧場の後次いで牛の世話してるんです……………だまされたと気づいたときにはもう遅いですよね、母ちゃんがやっこの思いで作ってくれたお金なのに……………牛一頭いくらだか知ってますか?……………鹿児島牛はね、安いですよ!鹿児島はやっぱり黒豚なんですよ。それなのにだまされましたと、のこのこ帰れないじゃないですか!」

### 問

有村 「僕だって何回も思いましたよ!何かのレッスンにいかうかな、ボイストレーニングに通おうかな?なんてことはね!でもね、どこに行くのも全部お金がかかるじゃないで

すか！そんなお金どこにあるんですか？バイトしてアパートの家賃払ってどこにそんなお金があるんですか？だからカラオケボックスでバイトしてるんです。歌のそばにいたかったんです。一番いろんな歌が聴けるんです。空いてる時間に練習もできるんです。くそくそ！」

先生 「……」

間

先生 「わかったよ。」

有村 「！」

先生 「君の思いは伝わった。私が責任もって君を一人前の歌手に育てよう。」

有村 「ありがとうございます。」

先生 「ただし、条件がある。」

有村 「条件だろ何が何だろうが先生に指導していただけるなら何だって聞きます。」

先生 「まず、私の言うことには絶対逆らわない！」

有村 「もちろんです。そんな、教えてもらおう先生に何で逆らうんですか？」

先生 「うむ！……二つめは今後一切、尾崎豊の Oh my Kittle girl は歌わない！」

有村 「???何ですか？」

先生 「尾崎豊の歌だからだよ！彼の歌は、彼が自分で作詞をして作曲をした曲だ！と言っているんだよ、彼の思いが100パーセント入ってるんだよ要するにその歌は、彼のための歌なんだよ！そんな歌を歌っても何の意味も無いだろう！君が素人でカラオケで楽しむために歌うならそれでも良いと思うんだが、君はたった今からプロの歌手として歩き出すんだよ！」

有村 「でも僕は自分の歌なんて持ってませんよ。それに作曲なんてできませんし……」

先生 「大丈夫！」

有村 「?????」

先生 「ずいぶん前になるけど僕が作って誰にも提供してない楽曲があるんだよ！それを君にあげるから君はその歌を自分の物にして歌い上げてくれれば良い！」

有村 「えっ？曲をいただけるんですか？」

先生 「ああ……」

有村 「ありがとうございます。早速聞かせてもらえますか？」

先生 「まーそう急ぐな。まずは歌詞を読んでみなさい。」

先生部屋の奥から歌詞を取り出し有村に渡す。

先生 「ほら、声に出して読んでみなさい」

有村 「俺が誰かなんて おまえがなんで 気にするかなって 考えた だって

細かい 気遣い 不愉快な ちよっかい 特別扱いは マジでやっかい

なんで そんなに興味持つの？ お前と俺の関係は何なの？

たまたまバイト先で出会っただけで 親友気取り はもう懲り懲り

周りの奴らはチャラチャラと着飾って お前の話すおベンチャラに酔って

ベンチャー企業立ち上げるだとか イケテルオンナたくさん抱くとか

中身が無い内容の会話 や熱弁 詭弁 は本と御勘弁

俺がどんな夢を抱いて この街来たのか どんなひどい思いして 働いてるのか

何も知らねーくせ すぐつける難癖 まとわりつくくせ しゃらくせー

空っぽの財布 で過こす俺のLife つかはこの手に つかむぜ **Big Dream--**

**My Dream--**」

有村途中まで読んで

有村 「先生、これ長くないですか？」

先生 「長くないよ！曲にしたら3分ぐらいじゃないかな？」

有村 「えっっそうなんですか？何番まである曲ですか？」

先生 「二番までだよ！ほら最初の部分だけで良いからもう一回読んでみなさい！あっ次はさ

っきよりもう少しテンポを上げて読んでね！」

有村少し違和感を感じながらも言われたように歌詞を読む。

先生 「うんいいね！いいよー！その調子その調子」

有村 「そ、そうですか？」

有村なんだか解らないが褒められたのですこしうれしい。

読む有村！

先生 「うん、今度は少しずつ行こうか、いいかい、言葉の最後にアクセントつけてもらえる

かな？」

有村 「アクセント？」

先生 「そう、その俺が誰かなんてのなんてと、おまえがなんでのなんで、かなって、だって  
にアクセントつけてよんでみて。」

有村 よくわからないがやってみる

有村 「俺が誰かなんて おまえがなんで 気にするかなって 考えた だって」

先生 「おいしい！・・・アクセントは良いんだけどねほら一応歌手なんだからさ、リズムに  
も乗ってほしいんだよね！」

有村 「リズム?????先生曲も解らないのに、リズムもくそも無いじゃないですか！」

先生 「バカ言っちゃいけないよ！曲が解らなくてもリズムに乗ることぐらいできるでしょ、  
じゃーわかったよ僕がリズム出すから！・・・ズツチャ、ズズツチャ、ドン、ズツ  
チャ、ズズツチャ、ドン！ほら、君もリズムに乗ってごらん！」

有村 リズムに乗って踊り出す

先生 「ほらそのリズムで歌詞読んで！」

有村 リズムに乗りながらだからか、なかなかうまく歌詞が読めた。

先生 「いいじゃん、いいじゃん！」

有村 「チョット待ってください、先生！これひょっとしてラップですか？」

先生 「そうだよ。」

有村 「・・・」

先生 「それが何か？」

有村 「無理ですよ！ラップなんてやったことないし！」

先生 「だからやるんだよ！」

有村 「なんでラップなんですか？こんなただ早口でしゃべってるだけじゃないですか？僕  
はもっと心を込めて愛だとか恋だとかを歌いたいですよ。」

先生 「ばかも~~~~ん！」

有村 先生の突然の大声にびびる！

先生 「何を言ってるんだ！お前にラップの何が解るんだ！いかラップこそが心の叫び、魂の叫びじゃないか！愛だ？恋だ？なんだそれ？そんな生ぬるいこと言ってるんじゃないよ！お前歌手になりたいんだろ？田舎の母ちゃんに借金までして東京に出てきたんだろ？そしたらだまされてた、詐欺に遭ってた！悔しい思いしたんだろ！」

有村 「はい……」

先生 「そのお前の強い思いを歌詞に込めるんだよ！怒りをぶつけるんだよ！情熱だよ！パッションだよ！」

有村 「パッション？」

先生 「そうだよ！パッションだよ！お前のドナドナを楽しみにしてる母ちゃんのことを思い出せ！」

有村 「母ちゃんを？」

先生 「そうだよ！」

有村 「でも先生この歌詞に母ちゃんを連想させる言葉は入ってないんですが？」

先生 「ばーか！つたくだからダメなんだよ！いいか、この部分だよ！俺がどんな思いしてこの街に来たのかってあるだろ、お前……」

有村 「はい……」

先生 「お前はどんな気持ちで東京に出てきたんだい？……えー？……その、どんな思いでと言つところにお前がだまされた全てが集約されてるんだよ！馬鹿たれが！そこに  
お前が東京に出てきてからの12年間の気持ちをぶつけるんだよ！」

有村 「なるほど、そこに全ての思いを込めるんですね」

先生 「そうだよ！」

有村 「しかしそれだとかなり暗くなってしまうんですが？」

先生 「く、暗く？」

有村 「はい、東京に出てきてからも良い思い出は一つも無いので……」

先生 「わかんねーやつだな！良い思い出なんか聞きたくないんだよ、つらいことが多かったんだろ！そのつらさ、苦しさ、それをぶつけるんだよこのバカたれが！それがパッションだろ！お前のパッションが入ってれば聞いている人の心が動くんだよ！と言つよ  
りお前のパッションで動かすんだよ！」

有村 「あー、何となく解りました。」

先生 「頼むよ！……」

有村 「すいません……」

先生 「じゃーほら、一行目からもう一回やって！」

有村 「はい」

有村同じ所をもう一度読む

先生 「もう少し早く！」

有村 「はい！」

先生 「うんいいよ！ じゃー次2行目！」

有村読むがリズムにつまぐ乗らない  
何度かチャレンジするがうかしくない

先生 「う〜〜ん……………」

有村 「何か可笑しいですか？」

先生 「ハート！」

有村 「はい？」

先生 「ハートだよ何度も言わせるな！」

有村 「ハート……ですか？」

先生 「そう、ハート！」

有村 「……………」

先生 「いいか、その2行目の歌詞普通に読んでみな」

有村 「細かい お節介 不可解な 気遣い 特別扱い マジでやっかい」

先生 「そこ！」

有村 「はいっ？」

先生 「そのマジでやっかいのところ！」

有村 「まじでやっかい。これが何か？」

先生 「君のはね、あまりやっかいじゃないんだよ！ やっかいだなくという感じが伝わってこないんだよな、もっとこうき、ほんとうにやっかいで困るんだけど言っ思いを持ってうたってくれないかな！ …… 本当にやっかいな時に、マジでやっかいと明るへ言われてもね？ 何もこないんだよな……、響かないんだよ！」

有村 「はぁ……………」

先生 「マジでやっかいって言ってるんだよ？ なんかあるだろっやっかいだなくと思っことがさ、それ思っ言ったらそんなに明るくならないでしょ！」

有村 「……………」

先生 「ほら、君のカーちゃんが好きなドナドナの歌詞だってそうなんだよ！かわいい子牛売られていくよ、悲しそうな瞳でみているよの部分やさ、楽しい気分で明るく歌うと変でしょ！歌う時はさ、歌う側もかわいそうな悲しい気分になるでしょ！」

有村 「はい」

先生 「それと一緒にだよ！本当にやっかいだと思ってよ！」

先生言うってみる

先生 「マジでやっかい！みたいになさ！・・・ね、こっぴう風にさ・・・なんか大変なんだなと想像できるでしょ？」

有村 「はい」

有村先生の口調を真似して言うってみる。

有村 「マジでやっかい」

先生 「それ！」

有村 「？」

先生 「それだよ、それ、その感じ、良いね、今の忘れないでよ！」

有村 「はい」

先生 「じゃー2行続けて歌ってみようか？リズムに気をつけてね、後ハートね！」

有村 「はい」

有村ハートを込めて歌う

先生 「うん、もう少し早くしようか」

有村 「はい」

有村早く歌うが今度は舌が回らない

先生 「滑舌悪いな！」

有村 「滑舌？」

先生 「うん、呂律回ってないよ！」

有村 「呂律」

先生 「ちょっとさ、これ出来る？」

先生下を奇妙な形に動かして音を出す

先生 「やってみて！」

有村 「?????」

有村 チャレンジするができない

有村 「あの〜?どつやってるんですか？」

先生 「ん?」

有村 「いや、あまりに奇妙な舌の動かしかたなので、……」

先生 「ん?子供の時やらなかった?これで遊んだ記憶ない?」

有村 「やりませんよ、そんな下品な音出して遊ぶなんて」

先生 「そうか……でも、これ出来るようになったら滑舌良くなると思っただけだな」

有村 「だからどつやるんですか？」

先生 「どつやる?どつやるかなんて解らないよ!こつやるんだよ!」

先生再び怪しい音を出す

有村 「だからその舌の動きはどつやったら出来るんですか？」

先生 「そんなの解らないよ!物心ついたら出来てたんだから!」

有村 「はああ?」

先生何度か音を出してどつという構造になっているのか自分で確かめる

先生 「うん、なんかあれだね、ベロを超高速回転でしロしロさせてるんだな!」

有村 「高速回転ですか?」

先生 「超高速回転ね!やってみて!」

有村 「はい」

有村 チャレンジする

何度かやってみるうちに出来るようになってくる



先生 「はい、それ10分やって」

有村 「10分ですか？ハイ解りました。」

有村始める

先生 「今じゃ無いよ！毎日のトレーニングとしてだよ！いまやってすぐに滑舌が良くなるわけ無いでしょ！」

有村 「あっすいません。」

先生 「じゃ滑舌は要練習と言ったことで、一度ピアノに合わせてやってみようか？」

有村 「はい！」

先生ピアノを弾く

有村それに併せて歌う

何度も何度も繰り返し練習する二人！

だんだん明かりが落ちていく

時間経過

先生が段ボールを抱えて入ってくる。

先生 「出来たよ！」

有村 「出来ましたか？」

先生 「うん、サー開けてご覧なさい」

有村早速段ボールを開けてみる。

中には有村が歌った曲のCDが入っている。

それを一枚取り出す。

自分の歌が入っているCDをまじまじと見ながら

有村 「本当に出来たんですね」

先生 「あーとりあえず千枚作っただから。」

有村 「千枚……」

有村うれしそうに

有村 「僕、歌手になれたんですね」

先生 「ん？あーまーね、そういうことにナルのかな……」

有村 「先生！ありがとうございます。これがいよいよ店頭に並ぶんですね。発売日はいつですか？」

先生 「いやいや、そうあせりなさんな。いいかい、確かに君のCDはできた。しかしね、このCDは店頭発売は出来ないんだよ！自主製作だからね。君がいろんな所に持って回って自分の手で売るんだよ！」

有村 「自分の手で？」

先生 「そう自分の手で、君はレコード会社と契約しているわけでもないし、大きなプロダクションに所属しているわけでも無いからね。自分の手で「ツッコツ」と売って回らないといけないんだよ！よく聞くだろ？新人の歌手がキャンペーンと言って全国のCDショップを回ってるって」

有村 「はい……」

先生 「どんな歌手の人でも、最初はそうやって自分の手で、足でお店を回ってCDを売るもんなんだよ。」

有村 「なるほど、わかりました。ジャー先生早速売りに行きましょう。」

先生 「いや、まてまてまて……」

有村 「?????」

先生 「私の仕事はここまでだよ！これからは君は自分の力で頑張るんだよ！僕の仕事は君歌をレコーディングしてCDにするまで！ここから先は僕の出る幕じゃ無いから」

有村 「えっ？僕一人で売って歩くんですか？」

先生 「そうだよ！頑張ってるね！」

有村 「……………」

先生 「どうした？」

有村 「僕一人で売って歩くななんて……どこに売って歩いたら良いんですかね？」

先生 「それは僕に聞かれてもわからないな……」

有村 「……………」

先生 「ほら、バイトしているカラオケボックスとかにおいてもらえばいいじゃない！レジの所においてお店で売ってもらえば良いじゃないか！」

有村 「あー僕のバイト先に置いて、お客さんに直接僕が売ったら良いのか！」

先生 「そうそうそう！……それと田舎のお母さん！お母さんにも買ってもらえば良いんだ

よーそうだよ、田舎に帰れば友達だっているだろう！・・・それに君は歌手になったら真っ先にすることがあったんじゃないかね？」

有村 「・・・」

先生 「まだ売れてないけど君はもう立派な歌手なんだよ！歌手になって一番最初にしなきゃいけないことがあるでしょー！」

有村 「・・・」

先生 「お母さんの前でドナドナを歌うんですよーほら、とりあえずこのCDをもって田舎に帰りなさい。お母さんにCDを聞いてもらってドナドナを歌ってあげなさいー！」

有村 「・・・」

先生 「どうした？」

有村 「・・・帰りたいんですけど・・・その・・・お金が・・・」

先生 「・・・」

有村 「母ちゃんには電話で話します。で、CDが売れたら帰るよ・・・」

問

先生、ポケットから封筒を出し有村に渡す

有村 「・・・」

先生 「3万円あれば帰れるだろう！僕が貸してあげるから、これで田舎に帰りなさいー！」

有村 「・・・」

先生 「ははは、気にするなって、CDが売れたらそのお金で返してくれれば良いから、ほら、早く田舎に帰ってお母さんに報告しなさい」

有村うれしくて泣けてくる・・・

有村 「先生、本当にありがとうございました。ここまでこれたのは全て先生のおかげです。

このご恩は一生忘れません。そして必ず日本の歌手になりますからー！」

先生 「うん頑張って！・・・ほら、早くお母さんにCDを届けなさい」

有村 「はい。」

有村、荷物をまとめて出て行くところ

先生 「あーそれから、田舎に帰ったらで良いからその封筒に入ってる紙をよく読んでください  
いね。そこに振込先も書いてあるから・・・」

有村 「振り込み先？」

先生 「うん、今回のレッスン料とCD製作にかかった費用全部併せて300万ねーよろしく」

間

有村 「え〜っ？お金取るんですか？？？？？？」

〜暗転〜

終